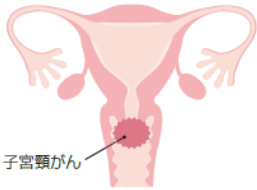


20代30代女性の
発症率が急増!

子宮頸がん



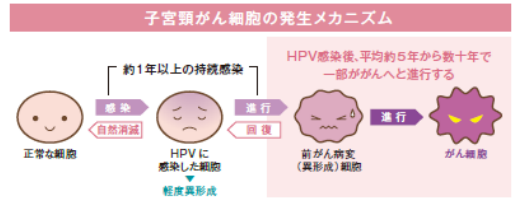
子宮頸がんは、子宮の入り口の**子宮頸部**と呼ばれる部分に発生します。
上皮内がんを含む子宮頸がんは、**20代 30代女性がかかるとの第1位**で、
子宮がん全体の約70%を占めています。

ただし、子宮頸がんは決して恐れる病気ではありません。5年相対生存率を見ても、初期の段階で
発見・治療ができれば生存率は**95.7%**です。子宮頸がんは、**早く見つければ治せる病気**なのです。

原因

体質や遺伝ではなく、性交渉によるHPV(ヒトパピローマウイルス)感染です。

原因のほとんどは、性交渉によって感染する**HPV**というウイルスです。HPVに感染しても、約90%の人は免疫の力でウイルスが自然に排除されますが、約10%の人はウイルスを排除できずに持続感染し、その結果、子宮頸部の細胞に異形成が起きて**子宮頸がん**へと進行します。



症状

進行がんになるまでは、自覚症状はほぼありません。予防には検診が最も有効です。

子宮頸がんは、初期や少しだけ進行した段階でも、がんは肉眼で確認できる大きさではなく、ほとんど自覚症状がありません。検診を受けなければほぼ気づくことができないので、症状が出る前に**定期的な検診**で**早期発見**することが重要です。

また、一部の子宮頸がんは急速に進行することがあります。検診で異常がなくとも、**出血やおりものの異常**などの症状があれば、すみやかに保険診療で産婦人科を受診することが大切です。

治療

早期であれば、簡単な手術で処置ができ、子宮も残せて、妊娠も可能です。

子宮頸がんは、がんの進行によって治療法が異なります。前がん病変やごく初期の子宮頸がん(妊娠希望がある場合)の治療では「**円錐切除術**」や「**レーザー蒸散術**」が行われ、子宮を残すことができます。しかし、それ以降の進行したがんでは、がんの進行の程度によっては、手術のほか、放射線療法や化学療法を組み合わせた治療が行われます。手術は原則として、子宮だけでなく、膣の一部、周辺の結合組織、リンパ節、卵巣、卵管などを切除する「**広汎子宮全摘術**」が行われます。

検診

20歳を過ぎたら、2年に1度の検診(細胞診)が予防の役割を果たします。

HPV感染から子宮頸がんへと進行するまでには、およそ**5年~数十年**という長い年月がかかるとされており、定期的な検診を続けていれば、がんになる前の「**異形成**」の段階で病変を見つけることが可能です。がんに進行する前に発見することも可能で、予防と早期発見につながります。性体験が低年齢化している現在では、**20歳を過ぎたら少なくとも2年に1度の検診**が大切です。

精密検査

検診で異常が見つかったら必ず精密検査を受けましょう!

検診にて異常が見つかった場合、さらに「**コルポスコープ**」と呼ばれる腔拡大鏡を使った精密検査が行われます。子宮頸部の粘膜の表面を詳しく観察し、異常な粘膜の状態や範囲を確認します。コルポスコープによる観察で異常が見られた場合は、小さな組織を取って確定診断が行われ、経過観察か治療が必要かの判断がなされます。検診で異常があっても精密検査で経過観察となることも多く、正しい処置やご自身の安心を得るために、**結果を放置せず**に必ず**精密検査**を受けましょう。